



# 現代中国村落の存立構造 : 顔役の個的資質を媒介に 立ち上がる村落生活

首藤, 明和

---

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2001-09-30

(Date of Publication)

2008-11-27

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲2386

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1002386>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



【190】

氏名・(本籍) 首藤 明和 (大阪府)

博士の専攻分野の名称 博士 (学術)

学位記番号 博い第363号

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

学位授与の日付 平成13年9月30日

【学位論文題目】

現代中国村落の存立構造

—顔役の個的資質を媒介に立ち上がる村落生活—

審査委員

主査 教授 佐々木 衛

教授 北原 淳

教授 森 紀子

助教授 藤井 勝

本稿では、現代中国村落の存立条件について、顔役という個性的人間のもつエネルギーからアプローチする。このアプローチは次のような作業仮説に基づく。「中国社会の現代化は個人（顔役）の資質にみられる差異を反映したものであり、中国農村社会構造は個人（顔役）のエネルギーをダイレクトに汲み出す構造特性をもっている」。

本稿を通じて、こうした仮説がどこまで説得力をもつのかを論証する。その際、現地調査で得たデータに基づきつつ、実証的な論述を試みる。調査地は中国東北地方（遼寧省撫順市）の都市近郊村（龔家溝）である。調査は2000年2月から8月にかけておこなった。

\*

本稿の分析枠組みは、次のような手順で準備される。まず、現代中国村落の類型化を試みる。そのねらいは、村落のもつ多様性の内容と偏差の幅を総体的に把握する枠組みを設け、調査事例村落の全体的な位置を明瞭にすることである。中国村落は不断に構成されるプロセスにある。仮に農村住民の生活保障組織として成立するケースがあれば、そこに中国村落の姿を実体的にとらえるのではなく、中国村落のもつ多様性と偏差のなかで、いかなる要因によってそうした生活組織が構成されたのかを問わなければならない。

村落の類型化にあたっては、まず村落の人的結合を支える要素として政治的経済的な構造条件に着目する。その上で、中国農村社会の構造特性と関連させつつ、顔役という個性的人間を、政治的経済的構造条件に規定されつつも一方でそれらに働きかけ構造化をおこなうエージェントとして位置づける。村落の類型化は顔役の志向性を指標としておこなう。

顔役の社会的な意味内容は、社会の具体的事象のレベルでは「仲介者」、抽象的レベルでは「規範適用方法の選択者」（「規範の適用」を他者に影響力を行使するなかでおこなう）として方法論的に定位する。顔役は、村幹部や企業経営者といった社会的属性に同定させて論じるのではなく、意味世界に積極的に関与する行為者としてゆるやかにとらえる。

\*

以上のような分析枠組みにより、次のような理論的射程を確保することができる。

第一に、「宗族代表的顔役型」や「村落代表的顔役型」の村落では、本村人関係に基づいて利益の排他的専有がおこなわれ、村外社会にたいして閉鎖的な傾向が示される。しかし顔役の存在に焦点を置くことで、顔役を媒介にして村外社会の資源やシンボルが獲得されるという、村落の開放的側面もみることができる。すなわち、村落生活の閉鎖性（顔役が適用した規範的価値と、それに親和的な村民の価値志向）と開放性（顔役を媒介とした村外社会からの資源、象徴の獲得）の重層的プロセスのうちに、村民の生活保障を位置づけ

ることが可能である。

第二に、顔役の存在に焦点を置くことで、個人を社会変動の担い手として描くことができる。村民結合形態（本村人関係や村民自治）や経済基盤の性質（公有／私有といった所有形態、市場／国家資産寄生といった経済活動の志向性）は、顔役の指導力や威信がいかなる社会関係や物質的基盤に基づくのかを表すと同時に、顔役がいかなる社会関係や物質的基盤を築くことで顔役としての地位を確保してきたのかも示している。村民の結合形態と村内経済基盤を、顔役の個的資質およびそれと親和的な村民の価値志向によって媒介させることで、村落社会経済構造の動態／静態の両側面を分析射程に組み込むことができる。

\*

事例分析では、農村住民の社会生活に強い影響をもたらす顔役に着目しながら、顔役の個的資質が生み出すさまざまな社会現象を通じて、現代化に生きる農村住民の姿を浮き彫りにする。

調査村落龔家溝の特徴は次のように整理される。都市近郊村、異姓雑居村で解放後から人口流入が激しい反面、山間村で人民公社時代から食糧供出の義務が免除されるほど貧困な地域であった。改革・開放後は農業の未発達、村有工場の不在、個人経営の発達（床板生産）などにより、村政府は村民を管理する契機をもたず、生活保障は個々の村民によっておこなわれた。村外社会との関係は開放的で、村を単位とした生活保障や利益の排他的専有などは存在しない。

こうした特徴をもつ龔家溝は、政治構造や規範構造のルースさが村の基本的な性格を形成する。龔家溝で「村のまとまりのようなもの」が発生する場合、その契機や性質は政治的顔役の個的資質（規範の適用方法やネットワークなど）によって方向づけられたものであり、規範構造が村落社会に根つき、村落生活に外在的な拘束力をもつということには至らない。

例えば、前書記 AZ は自らの書記就任の正当性を示すために公共事業をおこなった。AZ の村外ネットワークを通じて資源を動員し、舗装道路を完成させた。しかし、村落生活の公益に志向する価値規範は、AZ の自己表出の前に二義的に適用されただけだった。公共事業そのものが一過性、非連続性、偶然性、目的の恣意性などの性格を帯びているのはそのためである。公への志向性が、タイトな規範構造として村に根づくことはなかった。結果的に、道路の舗装は後の床板産業発展の礎となったが、もともと AZ には龔家溝村民の公益や福祉に関心があったわけではない。

現書記 XB も、個的資質の発露により村の規範構造に影響を及ぼしている。90 年代後半、ZB の村外社会のネットワークを通じて床板生産が村に導入された。その後、個人経営の床板生産が発展すると、生活保障は完全に各村民に委ねられた。村政府の財政源は土地使用権の売却益に依存し、土地管理は幹部たちが完全に掌握した。村政府は村民に経済的負担を求めないかわりに、村民は村財政の管理・監督への参加に固執しなかった。経済的基盤を棲み分けるなかで、村政府と村民は積極的非干渉のルースな政治構造を作り上げた。村落生活にそうした規範構造を適用したのは XB である。

しかし最近、XB の村民にたいする態度が変わりつつある。XB のネットワークを經由して村外社会（上級政府）の要求（増税）が村民に向けられ始めたのである。従来の村落生活のあり方が存続するかどうかは、XB の個人的判断に委ねられている。XB が従来の規範を稀釈し、新たな規範を適用する可能性もある。2000 年における「村のまとまりのようなもの」とは、皮肉にもこうした XB と上級政府にたいする、各村民の消極的反発の態度に見出せるほどである。

\*

AZ や XB のような顔役は、農村社会でも中心的な位置を占める。龔家溝には政治、経済、文化（民間社会）の各領域に、固有の対面集団に依拠した顔役が存在した。顔役は領域内で競争的な関係にあり、こうした状況が他の領域の構造に反映することもある。例えば「秋歌隊」（民間舞踊）の主導権をめぐる前書記 AZ と老戸 ZM の事例は、文化領域における競合関係が村の政治構造に反映されたものである。また、中国の伝統的な社会意識や威信の源泉とも関連するが、経済領域で競合する顔役が政治領域の威信と権威の獲得を目指すことは、龔家溝のふたりの書記、あるいは床板工場の大戸の例から明らかである。大户は村の工場の集団化を目指しているが、計画の実行には政治的威信の獲得と利用が不可欠である。

一方、村落生活には政治的、経済的に周縁に置かれた者たち（大部分の農村住民）も存在する。彼らを取り上げることで、龔家溝の村落生活はいつそう立体感を帯びることになる。具体的には、ある兄弟姉妹の歴史（文化大革命時代の下郷、改革・開放時代の都市への再移住、床板経営者としての自立へと向かうプロセス）を紹介する。彼らの経済活動（床板生産）を生活世界のなかに位置づけることで、周縁者にとって身近に存在する顔役を浮き彫りにし、周縁者が農村社会の中心的顔役へとどのようにつながるのか、いかにして村外社会へと開かれていくのが分析される。

\*

以上のような事例分析から得られた知見を、村落生活の存立条件に関して整理すると以下のようになる。分析枠組み上、龔家溝は「自己表出的顔役型」村落として分類した。自己表出的顔役は、その個的資質が同族的規範、地域団体の規範、村民自治の規範といった制度化された規範的価値と同一化できないところに特徴がある。したがって、顔役の個的資質（規範の適用方法や村外社会に広がるネットワーク）を通じて獲得、蓄積、増殖される資源やシンボルは、一面、農村住民の生活保障の基盤を村落生活のなかに立ち上げるが、反面、政治構造や経済活動のあらゆる局面で恣意性、偶然性、非一貫性が特徴となり、村落生活の規範は顔役の意向に左右される。

こうした状況を村落生活の周縁者（一般農村住民）からみると、顔役を多層的に獲得することで、生活保障のバランスを維持しようとしていることが浮き彫りになる。自己表出的顔役には少なくとも「中心的顔役」と「身辺的顔役」の二者が存在する。

村落生活の大局を方向づける「中心的顔役」は農村社会の中心的位置を占め、数百人から数千人の生活保障に影響を与える。しかし、中心的顔役の「気まぐれ」のなかに村民生活が放り込まれているので、農村住民は中心的顔役への依存だけでは生活保障が不安定になる。そこで農村住民は、きめ細やかな配慮を提供してくれる「身辺的顔役」を必要とする。身辺的顔役は、中心的顔役の気まぐれにたいする防波堤であり、また、農村住民が中心的顔役につながる媒介役を果たす。

\*

周縁者の範囲の限られたネットワークでは、血縁がもっとも高い頻度で利用される（切迫した生活保障の必要性は、頼ることのできる個的資質につながることに周縁者たちの関心を傾注させる。身辺的顔役が父系親族か姻族かという問題は、重要な意味をもたない）。それゆえ周縁者の顔役は血縁集団を対面集団とする傾向があり、顔役に期待される項目は機能が未分化で多岐にわたる。周縁者の顔役は、支えなければならない「しがらみ」が多い。

周縁者の顔役は、農村社会の中心的位置を占める顔役とは限らない。むしろ、政治や経済とは異なった方面での個的資質が期待される身辺的顔役である。彼らは血縁のしがらみが生み出す「協同と離反の振幅」に「耐煩」（辛抱強い）であることが期待される。自己実現とともに血縁者にたいしても物心両面の配慮を欠かさず、寛容な心をもった人物である。

確かに、周縁者と身辺的顔役のあいだには、血縁の重さを軽減しようとする志向性も存

在する。しかし、経済的自立には血縁者の援助に頼らざるを得ない状況があるなかで、経済的に自立してこそはじめて血縁の重さから解放されるという事態は、血縁の重さをテコにしつつ血縁の重さを軽減しようとする矛盾を言い表している。周縁者と身辺的顔役をめぐるしがらみは、こうした矛盾に起因する。協同ゆえに離反が生じ、それゆえにまた協同が結ばれる。彼らの悲喜劇は、このトートロジーのうちに存在する。

\*

ある農村住民にとっては、身辺的顔役が中心的顔役の場合もある。そうした場合、主観的關係（親疎の感情）が、中心的顔役の社会的布置に占める中心性（機能領域の代表性）より勝ることになる。中心的顔役は身辺的顔役と同様、人間関係のしがらみのなかに取り込まれ、機能的に未分化で多岐にわたる期待に応えなければならない。

こうした事態は、中国の農村社会では領域ごとに制度化された規範構造の成立が困難なことを物語っている。一般の農村住民は、資源とシンボルを擁する顔役につながることで生活保障を果たす。農村住民が中心的顔役につながる場合、その対面集団においては制度化された規範が構造化され得るが、しかし彼らの対面関係が親疎の主観的判断に基づいて彼ら自身によって定義されるならば（彼らは戦略的にそうすることが多いのだが）、領域ごとに制度化された規範構造は相対化され、状況主義的な規範の適用に取って代わられる。こうした、行為者による状況に応じた規範の適用は、顔役が個的資質の発露によって農村基層社会のダイナミクスを生み出す日常的場面を表しており、また一方で、そのような顔役の存在を支える農村住民の日常的な村落生活の姿である。

### 論文審査の結果の要旨

氏名	首藤 明和
論文題目	現代中国村落の存在構造 —顔役の個人的資質を媒介に主として村落生活—
要 旨	
<p>申請者が提出した博士論文は中国東北地方の都市近郊村(遼寧省撫順市河北郷糞家溝)における社会構造に関する民族誌(ethnography)的調査である。</p> <p>申請者は中国村落構造における成員の流動性、個人的関係の重要性に着目し、村落の社会生活が構成されるプロセスを検討している。中国社会の流動的な性格と社会関係における「個人の重要性」は指摘されることも少なくないが、実証的に論証することは難しい。申請者は村のリーダーの活動とその社会関係を検証することで、村落社会の流動性とリーダーにおける個人資質の重要性を論証している。また、事例から得られた社会構造的な特徴を、「顔役」という概念を媒介にすることで、中国社会の一般的な構造的な特徴に連続させている。</p> <p>申請者が中国村落をとらえる視点として、村落の共同性を実体としてアブリオリ・自明に存在するものとしてみるのではなく、村人の生活の場として不断に構成されるプロセスとして存立している、という基調がある。村落の構造をとらえる論点として、政治経済的な構造条件(経済基盤の所有形態、市場への接近度)に着目すると同時に、他方では、村落社会を構成する人々の「絆」の有り様(本村人と外村人の区分の強弱)、村行政に対する人々の関わり方(積極的と消極的)、そして活動を組織するリーダーの個人的資質が第一義的に重要になると申請者は考えている。ここに、申請者が村落社会の存立構造を村のリーダー、すなわち「顔役」から論じようとする中心的な意図がある。</p> <p>構成は8章からなる。「序章 研究の目的と方法」、「第1章 現代中国村落の諸類型—通底的構造としての「自己表出的顔役型村落」—」、「第2章 顔役の概念的意味—「仲介者」、「規範適用方法の選択者」としての役割から—」、「第3章 調査地の概要」、「第4章 顔役の性格が反映する村の政治構造—村政府と村民のルースな関係—」、「第5章 経済領域の顔役—大規模床板工場の経営者—」、「第6章 経済的顔役の周縁にいる者たち—小規模床板工場の経営者—」、「第7章 周縁にいる者たちの顔役—ある兄弟姉妹の歴史から—」、「終章 顔役の個人的資質が立ち上げる村落生活」、という構成である。</p> <p>調査村落の糞家溝は撫順市に隣接する都市近郊にあるが、人口の流入出が激しく、親族のネットワークを地域に展開させることができなかつた。また、解放時に28戸しかなく、一つの村としての機能を果たすだけの規模を持たなかつた。山のすそ野にあって耕地も少なく、山の柴を売りに出て、かるうじて生活のつじつまを合わせていた貧困地域でもあった。この村が、突如として1990年代半ばから床板生産の産地として全国に名を馳せるようになったのである。</p> <p>現在の本村人(戸籍を持つ)の人口は320戸、1170人。戸数が250戸余も増加したのは、人民公社時代に「下郷」した都市住民を受け入れたためとしている。この他に、村の常駐者として、外地から入っている出稼ぎ者が300人から400人おり、本村の流動性と雑居性が一層高まっている。</p>	
主査記載 氏名・印	佐々木 衛

本村が個人経営による床板生産で活気を呈するようになったのは、二人のリーダーによるところが大きい。一人は村の道路を改修してインフラ条件を準備した共産党支部前書記である。前書記は他村出身者であるが、本村の党支部の指導のために派遣されてきた人である。村のインフラ整備に道路が欠かせないことを主張し、村人の冷ややかな目にもかかわらず、個人的なネットワーク資源を使って基幹道路までの拡張と舗装を完成させた。もう一人は現支部書記で、本村に床板生産を導入し経済的な発展を引き出したリーダーである。本論の眼目は、二人のリーダーの生活史的略歴、村の中での位置、村組織の運営方法、村人の評価などの項目に関連させて、先の彼らの社会的性格を考察するところにある。

本村は、中国村落のほとんどの基礎にあると考えられている本村人/外村人という区別で排他的に利益を占有する傾向が弱い、いわゆるルースな構造を特徴としている。この中で、先の二人のリーダーの活動の論理は、いったいいかなるものと考えられるのであろうか。申請者は、自分の存在の正当性を村人に承認させるための「自己表出的」な特徴を指摘する。同族的規範(血縁)、地域団体的規範(地縁)、村民自治的規範(行政村)などの制度化された規範と異なって、自己表出的なリーダーは、恣意性、偶然性、非一貫性などの特徴を持つという。こうしたリーダーの活動が村人に利益をもたらし、存在が承認される限り、村としての緩やかなまとまりが存在していると結論を述べている。

なお、第5章、6章、7章で、床板生産者たちのリーダーについて事例を紹介している。大規模経営者は資本を持つ村外者であるのに対して、中小経営者の多くは本村出身者からなっているのが特徴である。大規模経営者は村が生産集団としてのブランドを持つことが競争に生き残る条件と考えているが、自営で経営する中小の生産者は、家族の均等分割で家産が均分されるように、拡散の方にベクトルを向けている。村のなかに自明のものとして共同性があるのではないという主張をここにもみることができると申請者は主張する。また、兄弟姉妹が反発しあいながら、しかし長姉の夫とその父の社会的な力を頼りに、生活機会を展開していく姿を紹介している。家族がそれ自体として協力関係にあるのではなく、有力な人物の力が家族の絆の求心力を構成するという、中国家族の個的な構造を示した。

理論的な展開においても、一般理論への関心が強く、中国社会研究から得られる知見を一般理論に接合しようとする努力している。しかしこの長所が欠点になることもある。理論的なモデルを提示しようとする試みは、往々にして記述を難解にすることがある。理論的に記述された箇所では、表現の難解さや、用語の硬直さが散見される。しかし、こうした傾向は研究者として成長する過程には必要なことでもあるし、また、モノグラフ的研究を積み重ねる過程で自ずと克服されるものと考えられる。

以上の結果に鑑み、本審査委員会は論文提出者、首藤明和が博士(学術)の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

#### 審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	佐々木 衛
副査	名法大 教授	北原 淳
副査	教授	森 紀子
副査	助教授	藤 井 晴